

教育課程改善－コロナ禍に考えたいいくつかのこと

吉 村 昌 彦

1 2020年の風景から

- 臨時休校が、生徒の心の発達に影響を与えていることが懸念されました。本校では、特別連絡日には、担任が一人一人の生徒と個別に面談し、思いや悩み、生活の様子を丁寧に聴き取り支えることを最重点課題として取り組みました。生徒の不安に寄り添い、新しい担任との信頼関係の構築に全力で努めたことは、結果的に以後の学級経営に大変役立ったと考えています。
- 6月、分散登校が始まると、生徒は皆、驚くほど穏やかに落ち着いて過ごしていました。距離感、発話量、集まる視線の数など、少人数指導や個別指導、不登校生徒の支援等に関するヒントをいくつか見出すことができたと感じています。
- 体育の授業や部活動の際にマスクを外すことが許容され、生徒の名前を覚えるスピードが加速しました。秋以降、喫食時以外のマスク着用の徹底が求められ、再び表情が読み取りづらくなりました。そんな中、例えばしっかり目を合わせて挨拶する生徒、頭を下げて笑顔で挨拶する生徒、部活動に行くと立ち止まって挨拶する生徒がいました。マスクを着用していても、思いが届くコミュニケーションスキルについて、生徒から学ぶことがたくさんありました。
- 新型コロナウイルス感染症は、死に至る病である怖さと共に、人と人との関係を切り離してしまう処に言い知れぬ恐怖を感じます。身内が亡くなった時ですら会うことができないなどという事態が訪れることを、一体誰が予測したでしょう。私たちがこれまで数千年以上も大切にしてきた触れ合いや温もりや人情が分断され、支え合い、助け合うことにも制約がかかるようになりました。一方で、少しでもルールを逸脱する行為を見つければ、自粛警察が正義を盾に容赦なく断罪し、二度と立ち直れないほどのダメージを与えるという事案も多く発生しました。日本人は、どこに向かっていこうとしているのでしょうか。弱者を労（いたわ）り、慮（おもん）ばか）る心の教育は、どのようにしていけばよいのでしょうか。
- デジタル化は喫緊の課題です。感染症対策や災害時の対応のみならず、国際会議や不登校支援等においても、時間と距離の縮減や衛生管理の点から、革命的に進展していくでしょうし、そうでなければ益々世界の潮流に取り残されてしまいます。それでもやはり学校は、本質的には生徒同士や教師と生徒が、様々に協働しながら、発見したり感動したり思いを共有したりという体験を通して、切磋琢磨して皆が成長していく場であってほしいと思います。このことを達成する手段として、ICT機器を効果的かつ積極的に活用していくことが肝要であると考えます。

2 「世界」の状況

- 「格差」が深刻化しています。貧困により必要な医療を受けられない黒人の死亡率が極めて高いとの報道もありました。
- 国連のグテレス事務総長は「ワクチン接種の75%をわずか10か国が占め、130か国はワクチンを受けとっていない」と指摘しています。
- 感染症に国境はありません。しかし世界が連携して対応すべきこの時にあっても、大国は分断することをやめません。それに追随するごとく、各国も、自国優先主義に陥っているように見えてきます。

3 これからの学校教育が大切にすること

- テストに向けた学習や、夏休み・冬休みの休業時に、自分で目標を立て、「計画→実行→評価→改善」を繰り返すPDCAサイクルによる実践を身につけられるように、学級担任に指示しています。目標設定の仕方、計画の立て方、実行する際の心がけ、評価・改善の視点など、生徒に考えさせながら個別に指導することにより、与えられなければ学べない生徒ではなく、自己調整しながら自ら学べる生徒に育てていく必要があると考えているからです。
- 授業においても、「正解のある問題に教師と挑む学び」では、ポストコロナを生き抜く力を得るのは難しいと考えます。「正解のない問題に自分で（仲間と）挑む学び」、「問いを見出し探究していく力」の育成が必要であると考えています。
- 未来に求められる基本は、世界が連携すること、恒久的な地球環境の維持と世界平和の構築だと考えます。そのために、自分は何をするべきか、どのような力を身につけることが必要か、生徒に考えさせていくことが重要だと思います。正解のない問いに果敢に対峙し、知識や知恵を活用して思考し、多様な人々と交流したり議論したりしながら、最適解や納得解を導き出していく力が益々求められてくるのだと思います。学校では、その力をどのように育ていけばよいのでしょうか。学校にも教員にも、「知識や知恵を活用して思考し、多様な人々と交流したり議論したりしながら、最適解や納得解を導き出していく力」が必要なのだと考えています。
- 「貢献」はキーワードの一つと考えています。コロナ禍において、医療従事者が必死に対応を続けています。感染して命を落とした関係者もいます。医療従事者の家族を差別する心無い言動もありました。このような中、将来、医療従事者を志す若者はどれだけいるのでしょうか。社会に貢献して生きようとする若者は、世界に、日本に、どれくらいいるのでしょうか。私たちは、一人一人が一個の人間として別々の資質能力を持っています。それぞれが自分の幸せと同じくらい周りや社会の幸せを願い、そのために自己の力を存分に発揮することによって、豊かな社会が拓かれ、自分の人生も充実していくはずです。このことを、学校教育の様々な場面で体得させながら、「貢献」の意識を育ていくことも大切なことと思っています。